

Title	情念論を動かす情念：デイヴィッド・ ヒュームと書くことへの衝動
Sub Title	David Hume's passion for inquiring into the passions : "the disease of the learned" and his therapeutic experience of writing the Treatise
Author	若澤, 佑典(Wakazawa, Yusuke)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Keio University Hiyoshi review of English studies). No.81 (2025. 3) ,p.53- 77
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20250331-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

情念論を動かす情念

——デイヴィッド・ヒュームと書くことへの衝動¹⁾

若 澤 佑 典

1. はじめに——哲学者その人の抱える情念

情念論は哲学者たちを、探究の道へと駆り立てる。情念とは、個々人を内側から揺り動かす衝動であり、外界環境との応答関係から生まれる心的力動であり、各人の行為／活動の背後に存するものである。「情念」(passion)ということばは多義的であり、「感情」(emotion)や「情動」(affection)、「情操」(sentiment)といった用語と、交換可能な意味で用いられることもある。情念論は、例えば古代においてはストア派が、近世の17世紀においてはデカルトが、近代の18世紀においては啓蒙思想家たちが、各々、語の意味内容と対象設定を持ち、論究を展開している。こういった背景から、情念論が何を意味するか、哲学者の間で完全な一致があるわけではなく、探究の系譜といったものは存在すれど、その流れは断絶や錯綜を含んでいる。

情念論は迷宮であり、哲学的主題として情念は難物である。ただしこうした状況は、情念とその探究が、人間社会の遥か彼方にあることを意味しない。哲学者であろうとなかろうと、個々人は日常生活で内的葛藤を経験

し、内的衝動に突き動かされ、時には、自らの内にある力動に意識を向ける。各人、情念が何かは明瞭に言語化できずとも、それが何であるのか、経験的／体験的に知っている。情念は日常世界の内にあり、情念論も日々の生活体験の中から、生起する知である。どんな抽象的思考に没頭しようとも、哲学者もまた日常に生きる人である。彼／彼女は身体を持ち、生活空間の中で人や物と応答し、自らの心の内で情念が流動している。このように本稿が注目するのは、日常世界における情念の経験が、抽象的思考／知的探究としての情念論を生み出す過程である。

情念の個人体験と情念論の生成を考える上で、英語圏の哲学者デイヴィッド・ヒューム (David Hume: 1711-76) の生と思索は、格好のケース・スタディとなる。若き日のヒュームは、読書と知的探究に没頭しすぎたことで、名状しがたい心身の危機を経験し、一度は哲学の世界から身を引いている。自らの中で荒れ狂う何物かによって、彼の思索は中断され、身体にまで影響を与えるに到った。結果、哲学探究から商人への道に方向転換を計るが、その失敗を経て、三巻本『人間本性論』(*A Treatise of Human Nature*: 1739-40) を出版し、その第2巻は「情念について」(“Of the Passions”) と題されている。

情念論の系譜を語るとき、その思想史的叙述の中で、ヒューム哲学の有り様は無視することができない。18世紀ヨーロッパの思想空間で、感情は主要なトピックであり、ヒュームを含むスコットランド啓蒙の哲学者たちは、17世紀の知的遺産を批判的に継承しつつ、英語で情念について言語化・理論化を行った。また、知性論から道徳論、あるいは政治論にまたがる、ヒュームの思考世界全体を眺めたとき、情念論が重要な位置を占めていることも、ヒューム研究においては共通了解となっている、あるいは少なくともなりつつある。ただし、こうした思想史上の了解事項と、ヒュームの伝記的事実が交差的に参照されることは稀である。

一方で、ヒュームの情念論に対する理論的・体系的・包括的アプローチがあり、他方で、ヒュームその人に対する伝記的研究が存在する。両者が

別々に扱われる背景として、そもそも『人間本性論』が匿名出版されたという歴史的事実、思想体系の精査において、哲学者個人の生は脇に置くという、哲学テキスト読解の一般前提などが挙げられるが、哲学／思想史の視点と文学／文芸的読解を組み合わせたとき、ヒュームの個人的情念と情念論の連環が立ち現れてくる。『人間本性論』第2巻で「何が」語られているかだけでなく、情念が「どのように」語られているかに着目したとき、その哲学散文のスタイルは固有の特徴を持っており、ヒュームその人の個人的経験を想起させるポイントがたびたび見える。当該書は明らかな自分語りの書物ではないが、しかし情念論の語りの背後に、ヒュームの生が透けて見えてくる。

2-1. テキスト読解の対象——デイヴィッド・ヒュームの自分語り

ヒュームその人の生を辿る上で、キーテキストとなるものは二つある。第一に、晩年のヒュームが死を前にして準備した、自伝(“My Own Life”)が挙げられる。1776年に執筆され、その年の内にヒュームは亡くなり、翌年、死後出版として発表された。全部あわせて数頁、二十一段落の文章で構成されており、掌編散文である。若き日に「文への情熱」(a passion for literature)に揺り動かされ、書物を愛し、読書と執筆に没頭した「文筆家」(a man of letters)として、自らの生を回顧している(L3, 10)。本テキストは出版物であるため、ヒュームが実際どんな人であったかに加えて、彼が自分を読者たちにどう見せたかったのか、ヒュームの自己演出を考える手がかりとなる。翻って、こうした自己プロデュースの意図から、自伝がすべて率直かつ素直に、ヒュームの生について語っているとは限らない。この「ヒュームその人」と出版世界における「アイコンとしてのヒューム」の重なりと断絶、いわばヒュームの実像と虚像をめぐる力学に注意せねばならない。

第二のキーテキストは、20代のヒュームが1734年に書いたとされる、

スコットランド人医師への手紙である。病を経験した若き日のヒュームは、自らの将来について考え、故郷のスコットランドを離れてプリストルに赴き、商人のキャリアを歩もうと心に決める。この旅路へと向う前、ヒュームは自身の過去や病気の経緯、その自分なりの解釈を文章にまとめ、ロンドンに住むスコットランド人医師へと送ることで、アドバイスをもらおうと考えた。この手紙は匿名で書かれ、結局のところ投函されなかった。送り主についても、ヒュームが誰を念頭においていたのか、明確な記載はない。手紙の原本は2024年現在、スコットランド国立図書館（National Library of Scotland）に所蔵されており、閲覧が可能である。また、J. Y. T. Greig 編のヒューム書簡集（*The Letters of David Hume* 1932, 2011）にも三番目の書簡（Volume 1, Letter 3: 12–18）として収録されている。

この若き日の書簡は、ヒュームの自伝と真逆の特徴を持っているため、注目に値する。自伝が出版市場を意識していたのに対して、この手紙は他者の視線を避け、自らの背景を病気の相談という形で、かなり率直に語っている。また、自伝が老ヒュームによる事後的な振り返りであるのに対して、本書簡は、まだ何者にもなっていないヒュームが、複数の将来への可能性に開かれた中で、文筆を始める前に書いたものである。自伝が（ほぼ）閉じられた生への総括であるならば、この書簡は探究の原点において、開かれた未来に向けて書かれたものである。それ以後のヒュームを予期する箇所もあれば、その後の人生では選ばれなかった「あり得たかもしれないヒューム」を示す箇所もある。いわばヒュームという人が、探究の出発点（あるいはそれ以前）に持っていた潜在的方向性、あるいはそれ以降の生をめぐる「反実仮想的な想像」を、現代の読者に誘う力を持っている²⁾。

2-2. テキスト読解の対象——ヒューム情念論の構造と語り

『人間本性論』第2巻は、その外観と実態に思いのほか、ギャップを持った書物である。冒頭における「知覚」（the perceptions of the mind）の「印

象」(impressions)と「観念」(ideas)への二区分、そこから導き出される「反省の印象」(reflective impressions)としての情念の定義は、本書が網羅的かつ体系的なものとなる(であろう)ことを、読者に予想／期待させる。しかし実際のところ、ヒュームによる情念論構築は、その語りの順序において、読み手を当惑させるだろう。最初に取り上げられる情念は、なんと「誇りと卑下」(pride and humility)であり、なぜこれを最初に論じるのかと、意表を突かれた思いになる。また、第2部の最終節は「動物の愛と憎しみについて」(Of the Love and Hatred of Animals)と題され、本書の結末にあたる第3部10節は「好奇心、すなわち真理への愛について」(Of Curiosity, or the Love of Truth)となっており、いずれも全体の総括というよりは、一見してなぜそこにあるのか分からない、謎めいたトピックが配置されている。ヒュームの情念論は、その理論構築とナラティブ提示において、言っていることと実際にやっていることが、必ずしも一致しないように見える。また、始まりにおける見通しと、結びでたどり着いた知的眺望は、重なり合いつつも等しくはなさそうだ。

本稿がとりわけ注目するのは、情念論の結びにあたる「好奇心」省察のセクションである。ここでは、真理愛に促された「多くの哲学者たちが(…)健康を損なってきた」(many philosophers [...] have destroy'd their health)事実が、ケース・スタディとして登場する。情念論の理論展開が、哲学探究のあり方と接続し、さらに事例設定の背後に、ヒュームその人の個人的体験を感じる箇所である。情念論の構築とは、人々が情念という力に促され、行動する様を描く過程を含む。好奇心という主題の設定は、情念に突き動かされるのは、人間すべて、一般的な人々のみならず哲学者も含むことを、全面に押し出すこととなる。情念に突き動かされる真理探究の様子は、ヒュームの自伝や書簡と交差して読んだとき、語りの背後に、彼の病気体験が透けて見える。『人間本性論』第2巻は、語りが進む中で変容する書物であり、その生成する情念論の到達点において、ヒュームその人の生の軌跡が、結果として浮かび上がってきていることを指摘したい。

3-1. 先行研究の射程と潜在的広がり——哲学者の生について語る

ヒュームの生涯と思索を交差する試みは、Annette C. Baier の *The Pursuits of Philosophy: An Introduction to the Life and Thought of David Hume* (2011) に、その先駆が見られる。Baier の言に依拠すると、当該書の出版以前、こうしたアプローチは E. C. Mossner のヒューム伝を含め「ちょっとばかり」(a little) 行われていたに過ぎない (2)。また、Baier は主としてヒュームの自伝を参照しており、若き日の病については、書簡を副次的に言及し、宗教の信仰心をめぐるクライシスとして提示している (10-12)。また当該書は、ヒュームと彼の母の関係について、身内に対する共感という点から、敬虔な母が無神論に傾く息子にどう接するかという形で、焦点化を行っている。読解の領域的方向性という点で、当該書と本論文は異なっているが、手法的な出発点を共有している。Mossner の *The Life of David Hume* (1954, 1980) について、当該分野への貢献を強調する点も、Baier とわたし (=筆者) の間で共通している。Mossner のヒューム伝は、第 6 章においてやはり書簡に立脚し、若き日の病に焦点を当てている。

伝記研究そのものではないが、当該領域に示唆的なのは、James A. Harris and Mikko Tolonen, “Hume In and Out of Scottish Context” (2015) である。ヒュームはスコットランド人であり、アダム・スミスを含む、スコットランドの友人たちと交流する中で、自身の思索を深化変転させていった。従って、あまり深く考えないと、ヒュームの書いたものにはほぼ自動的に、スコットランド哲学とか 18 世紀スコットランド思想といったラベルが貼られがちである。しかし、Harris と Tolonen が当該論考冒頭で示すように、ヒュームは「自身の著作物から、スコットランド性の痕跡を消去しようと意図」(intent on erasing traces of his Scottishness from his books) していた書き手である (163)。そこには潜在的に、ヒュームが何者であるかという、それ自体複雑な主題と、ヒュームが残した出版物やアイデアその

ものについて、ヒュームその人とどういった連続性／距離感を以て、それを理解しラベリングするか、というさらに込み入った問題が含まれている。

ヒュームの「文に対する情熱」は、執筆活動によって花開いたが、その始まりには本の虫、熱心な西洋古典読者の姿がある。この出発点を考えるとき、ヒュームをめぐる影響関係の研究（＝ヒュームはどんな本を読み、何に影響を受ける中で、彼の思考を形作ったのか）は、彼の生と思索を交差させる上で、有効な参照点となり得る。近世哲学、あるいは18世紀哲学の人々が熱心に古代ギリシャ・ローマの思想に親しみ、その反復的応用／変容のなかで自らを形作っていった過程は、例えば Tim Stuart-Buttle の *From Moral Theology to Moral Philosophy: Cicero and Visions of Humanity from Locke to Hume* (2019) に示されている。また、ヒュームが何を讀んだかに力点を入れ、彼の生の足跡をたどったものとして James A. Harris の *Hume: An Intellectual Biography* (2015) が挙げられる。

ヒューム研究を離れると、哲学を語ることと、自らを語ることの重なりを「声」(voice)の問題として示したのが、哲学者の Stanley Cavell であり、彼の *A Pitch of Philosophy: Autobiographical Exercises* (1994) は、哲学と文学を交差させる理論を提供しつつ、自らの生の語りの中で実践している。自伝や伝記的ナラティブという点からは離れるが、哲学と文学の交差という点では、勢力尚雅・古田徹也編『英米哲学の挑戦：文学と懷疑』(2023)のような試みもある。ここではヒュームの思考が、夏目漱石の文学ナラティブと並べられたり、懷疑という系譜からヒュームの世界がカヴェルの問題系に接続されていたりと、かなり思い切ったチャレンジが行われている。ヒューム固有のナラティブを読み解く際、どこか近くにカヴェル自身の「声」を感じるのは、当該書を眺める限り、見当違いではなさそうである。

3-2. 先行研究の射程と潜在的広がり——情念論という迷宮

ヒュームの情念論そのものにフォーカスした研究は、現在進行形で広が

りを見せている。一方で、ヒューム研究の包括的／網羅的な手引き書を開くと、知性論と道徳論のセクションに挟まれて、情念論のセクションを見つけたことが多い。例えば Elizabeth S. Radcliffe 編の *A Companion to Hume* (2008) も、パート 1 が「心と知識」(Mind and Knowledge) でパート 3 が「道徳と美」(Morality and Beauty) になっており、その間に挟まれてパート 2 の「情念と行為」(Passions and Action) が置かれ、三篇の論考が収録されている。David Fate Norton と Jacqueline Taylor の編による *The Cambridge Companion to Hume* (Second Edition; 2009) についても事情は同様である。ヒュームの懐疑主義を扱う第 7 章、ヒュームの道徳論の基礎付けを論じる第 9 章に挟まれて、情念論を検討する第 8 章「ヒュームの道徳心理学」(Hume's Moral Psychology) が置かれている。こうした設定は、『人間本性論』の三巻本構成を踏まえたもので、当該書にフォーカスした研究の手引き、例えば Saul Traiger 編の *The Blackwell Guide to Hume's Treatise* (2006) などでも踏襲されている。情念を概説するセクションでは、三つの論考が収録されているが、その一つの Jane L. McIntyre “Hume's ‘New and Extraordinary’ Account of the Passions” では、ヒュームと彼に先行する情念論の関係が議論されている。

これまで述べてきたように、ヒューム研究の概説書・入門書における取り扱いは「ヒュームの知的探究全体を考える上で、情念論を避けて通ることはできない」という共通理解を、概ね示している。情念論をまったく無視した、包括的なヒューム研究というのは存在しがたい³⁾。ただし、こうした全体的な位置づけとは対照的に、知性論や道徳論の如く、ヒュームの情念論そのものに特化した個別研究が、大量に生まれているかという点、状況は反対である。古くは Páll S. Árdal の *Passion and Value in Hume's Treatise* (1966) が先駆的研究としてあり、比較的近年のものでは、Jacqueline A. Taylor の *Reflecting Subjects: Passion, Sympathy, and Society in Hume's Philosophy* (2015) や Elizabeth S. Radcliffe の *Hume, Passion, and Action* (2018) が、ヒュームの情念論に対する包括的なアプローチを行っ

ている。ヒュームによる理性と情念の問題提起を受けて、現代（哲学）における理性のあり方を探るものとして、Mark Schroeder の *Slaves of the Passions* (2007) などにも注目に値する。関係する文献はいくつも挙げられるが、ヒュームの知性論や道徳論のように、あまりにも大量に関連研究がありすぎて、総括することすら難しいという状況と比べれば、ややギャップがある。

『人間本性論』第2巻の翻訳者である石川徹は、訳者解説において、当該書は「確かに退屈に思われるであろう部分が多い。もちろんヒュームらしい鋭い洞察は随所に見られるが、(…)第1部における叙述の繰り返しの多さや(…)第2部における議論が、相当に恣意的でアドホックであるように見えることなど、読者は不満に思うかもしれない」と述べている(229)。読者が、当人なりの哲学的問題意識を持っていたり、何かしらヒューム研究の事前知識を補助線としないと、ただ虚心坦懐に「情念について」を読んでも、面白いと思ったり、学術的な分析に向うことはなかなか難しい、という状況があるようだ。従って、ヒュームの情念論を論じる際、『人間本性論』第2巻を単独で論じるというより、第1巻を併せて参照し、知性論と情念論の内容的・構造的関係を探究するとか、第3巻と併せて読解することで、情念論がどのように、ヒュームの道徳哲学を下支えするのか、吟味するといったアプローチを取る形になりやすい。ヒュームの情念論は、何かと一緒に読むことで論じやすくなり、翻って、何と組み合わせるかで、議論の方向性や成果が変わってくると言える。

また、ヒュームを離れて情念論一般について言えば、これはヨーロッパ固有の知的文脈の中で生まれ、英語を含む、ヨーロッパの諸言語で語られてきたものである。しかし「情念」や「情念論」ということばの響きは、日本語においても日常感覚から遊離せず、どこか日本語で読み書きする一般読者へ、一定の訴求力を持つものである。古くは市井の哲学者であった中村雄二郎が『情念論』(1993)を世に問い、近年では、日々のことばで倫理学を語る哲学者、山内志朗が『小さな倫理学入門』(2015)のなかで、

情念と自己の「共生」について語っている(17)。情念論そのものではないが、山内の『感じるスコラ哲学』(2016)も「感覚も情念もあまりに激しくて、言葉に表現する余裕がないことも少なくありません。言葉が足りないのです。(…)感覚と情念に満ちあふれた生活を送る人々は、感覚論とも情念論とも無縁な世界に生きています」と、情念そのもの、あるいは情念を感じることに、情念について語ることのギャップに言及している(15)。

ヒュームが日常的な生活感覚の中で、情念について英語で書き、そのヒュームの情念論について英語で研究書が書かれる。その思考とことばが連鎖する更に先、私たちが日本語で情念について語ることは、依然として生活感覚と思考世界の接合が担保されている。これはヒュームを英語で読み、日本語で何かを書こうとするものにとって、希望である。

4. 情念論を語るための「ことば」たち

ヒュームの情念論は、「誇りと卑下」(pride and humility)をめぐるケース・スタディによって、具体的な探究に乗り出していく。そのまさに冒頭、誇りと卑下(という情念)の「適切な定義」(a just definition)が俎上にあがる(2.1.2.1: 182)。彼自身としては「言葉をどんなに積み重ねても」(by a multitude of words)これら二つの情念について、あるいは他の「どんな情念」(any of the passions)についても、厳密に論理的なことばで定義するのは不可能である、という立場をとる(2.1.2.1: 182)。ただしこれは、哲学的な情念の記述と分析が不可能であることを意味しない。ヒュームの探究において(その対象となる)誇りと卑下は、そのことばの哲学的な意味と「日常的な一般的使用」(general use)が一貫している(2.1.2.1: 182)。日々の日常生活の経験を元に、誰でも個々の情念が何かを(論理的なことばで定義できずとも)知っているし、その暗黙の共通理解をもとにして、情念の哲学的探究は可能になる。こうしたアプローチに「何か誤解を生むような恐れはな

い」(without any danger of mistake)とされる(2.1.2.1: 182)。情念について、哲学的に語る言葉が意味を持ち、書き手と読者の間で思考を共有できるのは、そのことばの背後に日常生活の体験、日々の生活空間が、哲学的コミュニケーションの下支えをしているからなのだ。従ってヒュームの思考世界において、情念論を語ることばは、どんなに抽象度があがり一般性を持つとも、それは日常世界からの遊離を意味しない。哲学探究(およびその言語使用)と日常生活の乖離は、情念論が了解可能な議論であるための、存立基盤を破壊してしまうのだ。

こうした哲学の世界と日常の世界の接点、そのダイナミズムの中で生成・機能する「情念を語るためのことば」という焦点は、情念論の冒頭のみならず、その探究の中核部においても姿を現す。情念論の第3部「意志と直接情念について」(Of the Will and Direct Passions)は、ヒュームの情念論のなかではよく引用され、人目をひくフレーズが散りばめられた部分であるが、ここで再び、情念をめぐる思考と言及は、「哲学」(philosophy)の言語空間のみならず、「日常生活」(common life)の会話にも根付いていることが言及される(2.3.3.1: 265)。人々は何かしらの形で、情念と理性の「闘争」(combat)関係に思いをめぐらせ、理性の優越性を共通了解としている(2.3.3.1: 265)。こうした論争は哲学者に端を発しているが、そのやり取りで飛び交う語彙は、哲学者以外の人々にとっても、ある程度は親しみ馴染んだものである。『人間本性論』第2巻において、ヒュームが情念論の構築に乗り出すとき、日常生活の言葉遣いと哲学の専門語彙が、ある程度混ざり合った言語空間が、書き手の前には広がっていた。

ヒュームが主要問題(の一つ)として挙げるのは、既存の論争で「理性」(reason)という単語が飛び交っているが、その言葉が「適切ではない意味で」(in an improper sense)用いられていること、そもそも理性という言葉を使って、当該トピックを論じることが混乱・誤解を生んでいる、ということである(2.3.3.4: 266)。この点で『人間本性論』第2巻＝ヒュームの情念論は、言葉の慣習的意味、及び、その適切な使用をめぐる実践的考察と捉

えることもできる。「理性とは情念の奴隷である、あるいは／さらには奴隷のみに止まるべきだ」(Reason is, and ought only to be the slave of the passions)というショッキングな、そしてよく知られたフレーズも、この情念論へのスタンス表明の中で登場する(2.3.3.4: 266)。

既存の理論的前提を揺るがす上で、書き手は、読者が驚愕するような表現をあちこちに散りばめている。上記の奴隷表現に加えて、「自分の指にひっかき傷をつくるくらいなら、代わりに世界全体の崩壊を選ぶことも、理性に反しているわけではない」('Tis not contrary to reason to prefer the destruction of the whole world to the scratching of my finger)というフレーズが、同じセクションで登場している(2.3.3.6: 267)。そんなわけがない、と読者が思うステートメントを提示し、荒唐無稽に見えるものを、了解可能な主張として説明し直していく。書き手は、議論展開の出発点において、自身の見解が「突飛な＝日常をはみ出した」(extraordinary)ものとして、読者の目に「映るかもしれない」(may appear)ことを認めている(2.3.3.4: 266)。情念／情念論について語ることは、そのナラティブ・ストラテジー上、読者を驚かせて議論に注目させることを含む。また探究の過程において、読み手の虚を衝く言語表現を、記述行為の副産物として生み出すこともある。情念論の構築とは、情念を語ることばを普段使いの言語空間から取り出すことであり、その結果として(逆説的ではあるが)日常を揺るがすような言語表現が生成することもある。いわば、情念論はことばの問題、言語表現／言語記述の先端を扱うことでもある、と言える。

5. 共感原理——情念論の「内」から「外」への反転

ヒュームは情念論第1部の終わりに向かい、第11節で、共感原理の導入と説明を行う。私たち人間の情念は、内側から湧き上がるだけでなく、周囲の人たちとのやり取りにおいて、生成しうることが指摘される。例えば、相対している人が「陽気な表情」(cheerful [sic] countenance)をしてい

れば、自分自身の心持ちも「満ち足りて、落ち着いた」(complacency and serenity)ものになってくる(2.1.11.2: 206)。自分が他の人と「交流する」(communication)過程で、相手側の情念が表情や会話を通じて、自分の内にも浸透し、同様の情念が生ずる現象を「共感」(sympathy)と呼んでいる(2.1.11.2: 206)。

共感という主題提起によって、ヒュームの情念論は「自らの内側をじっと見つめる」記述行為から、「仲間と共にあることを自覚した」語りかけへと、大きく展開する。いわば、心の内側に向っていた思考が、反転して、心の外側＝人と人とが交流する世界へと向っている⁴⁾。こうした情念論の展開／転回は、病後のヒュームが医師に向けて、手紙を書いた軌跡と重なる。書物の山に埋もれ、一人での思索に耽溺していたヒュームは、病気を機会に内省を中断し(あるいは中断され)、自らの身体経験を手紙で説明することに向った。例えば、そのような身体症状に苦しめられているのは、彼だけではないのかもしれない。ロンドンに住む医師であれば、ひょっとして、似たケースの治療をしたことがあるのかもしれない(*Letters* 18)。病気にせよ思索にせよ、自分でウダウダ考えているだけでは行き詰まってしまう。他者に説明・伝達する中に、袋小路の打開が模索されている。

病前のヒュームは「キケロやセネカ、プルタルコスといった多くの道徳の書物」(many Books of Morality, such as Cicero, Seneca & Plutarch)を読みあさり、そこに表現された「徳や哲学の美しいありようにウットリしていた」(being smit with their beautiful Representations of Virtue & Philosophy)ことを、病後の書簡で回想している(*Letters* 14)。彼はこうした、一人行く読書体験において、自らを古代の賢人たちに近づけようとしている。こうした哲学者たちに倣い、「死を想い、貧困に思い巡らせ、恥について考え、苦しみを省察し、その他すべての生の悲惨について、考えをめぐらせる」(Reflections against Death, & Poverty, & Shame, & Pain, & all the other Calamities of Life)ことで「自らに活力を吹き込もうと」(fortifying myself with Reflections [...])試していた(14)。しかし病後のヒュームは、それらが「心の活力を

損なう」(waste the Spirits) 活動になっていたことを反省している (14)。こうした内省は、自分が人々との賑やかな関わりの中であって、「活動的な生」(an active Life) に身を置くことで、はじめて意味を持つものである (14)。「孤独のなかで」(in Solitude) ただ考えに耽っても、健康を害し、自らの思考の世界を収縮させ、「目的がない時の腕のようなもの」(like our Arm when it misses its Aim) である (14)。勢いにまかせて、腕を振り回したり、ブラブラさせたりしても、徒労に終わるだけだ。

また共感プロセスの描出は、「もっとも明白な日常経験」(the plainest experience) に依拠するものであって、「何かしらの哲学的仮説」(any hypothesis of philosophy) に依るものではないことが、情念論では強調されている (2.1.11.8: 208)。情念について語ることは、自分自身の日々の体験から出発するのであり、書き手の自分 (=一人称) の体験が、読み手の相手 (=二人称) と共有可能なものとして了解されることで、はじめて説得性を持つ。いわば、書き手と読み手の間の「共感」的紐帯 (=書き手の主張に、読み手が「ナルホド、そうだよ」と実感をもつてうなづくこと) によって、共感原理の説明が、実際に駆動するのである。このメタ的な自己言及性が、ヒュームの執筆スタイルを理解する上で、理論の概念的有り様 (=思想) とその語られ方 (=文芸) の交差を考える上で、肝となるポイントである。

病の経験は、ヒュームの没入的な知的探究にストップをかけた。書物に埋もれ、何時も思索に耽るという探究スタイルは、心身の状態から維持不可能である。心と体の不調によって「何を」思考対象とするかだけでなく、「どうやって」探究するか、思考する主体のあり方について、路線変更の必要性に直面したのだ。自身のコンディションが小康状態となり、ヒュームは前とは違ったやり方で思索を再開する。ともかくも没頭はせず、やりすぎは避ける。あくまで「ほどほどに」(moderately) 思考を進め、あくまでも「自身の心持ちが一番高まっている時のみ」(only when I found my Spirits at their highest Pitch), すなわち、深い思索に心のコンディションが適している時のみ、探究活動を行うこととした (Letters 14-15)。

こうした変更／対応は、ヒュームの生活と活動に一定の「リズム」を生み出している。調子のいいときは前に進み、雲行きが怪しくなったらすぐ撤退する。寄せては引き、引いては寄せる繰り返しの中で、思考が少しずつ蓄積し、渦のようになって、思索が一つの方向性を獲得していく。病後、完治はしていないが、健康が落ち着いた時期、ヒュームは努めて「毎日散歩をして」(walk every day)、あるいは「週に二～三回、乗馬をして」(ride twice or thrice a week) 日々を過ごしている (*Letters* 15)。「もともと始めから、食事や生活の仕方もとても規則正しい」(I was very regular in my Diet & way of Life from the beginning) ことを、医師への書簡で説明している (*Letters* 15)。

6. 情念論の情念が顔を出すとき

『人間本性論』第2巻の哲学ナラティブは、その語りのクライマックスを、哲学体系の完成場面ではなく、その思考枠組みの破綻、少なくともその綻びが見える場面に置いている。ヒュームは情念論の構築において、情念を間接情念と直接情念に分類し、前者のケース・スタディとして「誇りと卑下」という個別の情念について、第1部で検討している⁵⁾。

この過程で、情念が個々人の内奥に関わるだけでなく、周囲の人々との応答関係、すなわち自らの外側と関わる「ソーシャル」なものであることが示される。共感原理が焦点となるのは、この内から外への転回においてであった。第2部でも、引き続き間接情念がフォーカスされ、「愛と憎しみ」という情念のケース・スタディが行われる。第3部においては、直接情念の論究に移行し、意志との関わりが主な主題となる。直接情念そのものの総括は第9節「直接情念について」(Of the Direct Passions: 2.3.9)で行われるが、ヒュームの情念論はここで終わらない。最終セクションは「好奇心、すなわち真理への愛について」(Of Curiosity, or the Love of Truth)と題されている。

最終セクションの冒頭で述べられるように、「真理への愛」はその特殊

さゆえ、第2巻で打ち立てられたスタンダードな情念論の枠組みでは、「難解さ／不明瞭さ」(obscurity)と「混乱」(confusion)を自説に招き入れる可能性がある(2.3.10.1: 286-87)。他方で、情念論の構築、さらには人間本性の解明というヒューム自身のプロジェクトは、真理への愛によって、突き動かされていた。いわば探究を突き動かす、思考の「源泉」(source)と言える(2.3.10.1: 286)。

ヒュームの情念論は、その理論的枠組みが定立されると、そのセオリー・メイキングを促してきた「情念論の背後にある情念」について語ろうとする。いわば、一つの哲学体系が、自身を作り上げた存在＝書き手／哲学者の本性について、解明を挑むのである。こうした自己言及的な試みは、情念論という思考枠組みの輪郭自体を揺さぶり、その存立を危うくする。このように最終節は、ヒュームの情念論を動かす情念を論じる、いわば自己言及的・メタ的視点をもった箇所であり、ここで主題化されるのは情念探究の主体であった「哲学者／哲学者たち」の有り様それ自体である。

好奇心の情念論は、「学びの悦び」(the pleasure of study)を全面に押し出す(2.3.10.6: 288)。『人間本性論』の筆者が考えるに、哲学探究とはまず以て、心地よいものなのだ。心の働きがなめらかに駆動し、各人の持つ力能と思考力が発揮され、何かしらの真理が発見されるか、あるいは理解されるに至る(2.3.10.6: 288)。こうした描像は、読者にとって驚くに当たらない。しかし意外なところで、読者にとって想定外な、文脈的に異質な表現を登場させるのが、ヒュームの筆の有り様である。こうした哲学探究の心地よさが、「賭博」(gaming)のハラハラ感と並置されるに到り、少なからず読者は意表を突かれ、驚くことになる(2.3.10.9: 289)。

哲学と賭博のアナロジーは、哲学探究の自己破壊性を示唆している、とも読める。賭博者は「あっという間のツキの反転」(sudden reverses of fortune)にぐいと引き込まれて、勝負の泥沼の中へと、気持ちよく没入していく(2.3.10.10: 289)。ゲームの始まりでは念頭にあった、直近の利益確保という顧慮は、どこかへと雲散霧消している。また、この描写で「反転＝

リバース」(reverses)という単語は、複数形となっている。目の前の勝負の風景が、ちょっとしたタイミングでひっくり返ることは、一度でなく何度も起ると、書き手は表現している。こうした状況変化のスペクタクルは、賭博の風景描写を介して、ヒュームが考える哲学探究の光景を肉付けする。両者のアナロジーを適用すれば、賭博で新たな局面が現出するように、哲学探究においても、それまでのロジックが急に崩壊し、出発時の見込みとは全く異なる帰結と遭遇したり、予期せぬ困難に論考がストップしたりすることは、ありふれた風景である。すでに『人間本性論』第1巻の知性研究では、懐疑論の吟味が袋小路に陥り、にっちもさっちもいなくなる状況を、ヒューム自身が経験し、これをドラマチックに演出していた。

当該節の冒頭では、「多くの哲学者たちが」(many philosophers) 真理の探究過程において「自らの持てる時間を蕩尽し」(have consum'd their time), さらに「自らの健やかさを破壊してしまった」(have destroy'd their health) ことが、書き手の経験的事実として、すでに述べられている(2.3.10.4: 287)。第2巻の結びは、書き手の論究的選択を指し示す、象徴的な箇所となっている。一方で、これまでの「真理への愛」(the love of truth)をめぐる考察は、数学の領域を越えて、道徳や政治といった分野へ「拡張されうる」(may be extended to) 可能性が言及される(2.3.10.11: 289)。助動詞(“may”)の使用で、推量のニュアンスが付加されているように、ここでの「拡張」指針は可能性として示されるに止まり、明瞭な論証の帰結として、結論付けられてはいない。他方で、「真理への愛」をめぐる(一段階上の)理論的一般化を自覚しつつ、書き手は「人間本性に根付いた、ある特定の好奇心」(a certain curiosity implanted in human nature)をトピックとし、議論の焦点をシフトさせる(2.3.10.11: 289)。数学における真理の探究、あるいは道徳や政治といった様々な「学」(studies)における「知識愛」(the love of knowledge)とは異なるタイプの好奇心、いわば嗜好きとでも言える詮索心が、第2巻の最後で、急にスポットライトを浴びることとな

る (2.3.10.11: 289)。

詮索心のうごめきは(書き手が明示するように)学の悦びとは違ったものであるのみならず、(書き手は明示していないが)潜在的には相互対立を抱えている、とも読める。「隣人たちの行動や状況を知りたいとガツガツ欲する」(an insatiable desire of knowing the actions and circumstances of their neighbours) 人々は、あくまで「人からの情報を全面的に頼みにして」(entirely depend on others for their information) 自身の知識欲を満たそうとする (2.3.10.11: 289)。この詮索プロセスにおいて、自身の得た情報が真正か吟味したり、自身で正確な知識を探そうという意志はない。あくまで噂話に過ぎない、正しいか間違っているのかハッキリしない、出所がよく分からない見識を愛でているだけなのだ。

第2巻では、二種類の好奇心が提示されつつも、両者の相克プロセスが明示的に語られることはない。最終セクションにおける断片的な記述から、二つのシナリオを想像することはできる。第一に、詮索的な好奇心が真理への愛によって抑制され、人間一人一人の心が陶冶されていく、いわば人間精神の啓蒙シナリオである。ヒュームの情念論に依れば、ゴシップ的な好奇心は人間本性に紐付いたものであり、その素地を誰もが有している。しかし、学の悦びを知り、真理の探究へと乗り出していく中で、根拠なき噂への積極的関心は薄れていく、という好奇心の一方が他方を凌駕するシナリオである。

第2のシナリオとして、真理を愛する学問の人と、噂を愛する詮索的な人といったように、人間本性の発露の違いから、人類の中で二種類のタイプが生まれるナラティブが想定できる。すべての人が真理の探究を愛するわけではなく、そこから心地よさを得るわけでもない。翻って、全ての人が自らの欲求に従って、噂好きになるわけでもない。人間本性の対立する傾向性から、違ったタイプの人間ができあがる、という説明が可能だ。人間本性の斉一性から多様性が生まれることは、例えばヒュームのエッセイでも「趣味」の問題として主題化されている。噂を愛するのは「いく

らかの人々」(Some people)であって、すべての人々ではない(2.3.10.11: 289)。ヒュームによるこの事例の限定は、第二のシナリオを考える際にポイントとなる。

第2巻末尾における書き手の選択とは、i) 更なる一般化に依った体系化の完成(少なくとも洗練)か、ii) 新たな個別逸脱事例を介した記述展開、この二つのうちどちらを取るか、というものだ。『人間本性論』冒頭に置かれたアジェンダに従えば、当該書を通底するのは体系化への意志であり、これに則れば、前者の選択肢が優先されそうに見える。しかし、書き手が実行したのは、後者の選択肢である。ヒュームの情念論(=第2巻)、あるいは『人間本性論』という書物は、「好奇心、すなわち真理への愛について」セクションで、全体総括は行われないうまま、とりあえずの終わりが迎えられる。

ヒュームの好奇心論は、哲学者像の更新と擁護も併せて行っている。世間の人々からすれば、哲学者たちの探究活動は「矛盾」(contradiction)を内包しているように見える(2.3.10.5: 287)。一見すれば「公共心」(public spirit)を何ら持っていないようだが、自身の探究が人間社会できちんと「重要」(important)かつ「有用」(useful)か、注意を払っている(2.3.10.4: 287)。いわば矛盾の解消を通じて、書き手は二つの極端な哲学／哲学者観を退けていることになる。哲学者が世俗的利害を一切考慮せず、自己の思考に埋没しているという、日常世界から遊離した存在という理解がある。これはよくあるステレオタイプだが、ヒュームの情念論において、こうした奇矯性は訂正の対象となる。行動原理は違うように見えても、哲学者の探究は有用性への顧慮という形で、日常世界の人々の価値観と接点を持っている。哲学探究は、自身のやりたいことをやりたいように行う、閉鎖的で自分勝手な営みではないのだ。

さらにヒュームの情念論は、倦怠感と危機感の両極でウロウロする、落ち着きのない存在として、人間一般を描き出す。一方で、日々の生活の単純な繰り返しに、彼／彼女は「飽き飽き」(tiresome)として、何か新しい

ものはないかと感じている (2.3.10.10: 289)。他方で、「あまりにも急で激しい変化」(too sudden and violent a change) には適応できないので、これを嫌い、なんとか避けようとする (2.3.10.12: 289)。あっちが立てばこっちが立たず、こっちが立てばあっちが立たずと、そのバランスがやっかいなものとして、人間の本性や日常生活が描かれている。

ヒュームは学が中断される場面、本が投げ出される瞬間が、どうやら気になるようだ。人間は上記のような傾向から、何かに急に熱中しては、あるポイントで人が変わったかのように、それを忘れる。情念論の末尾も、歴史書の熱心な読者が、過去の探究に興味を失う描写で閉じられる。ただし、これは歴史書の読者であって、歴史家ではないことに留意すべきだろう。読者はあくまで、歴史書の語りに身を任せ、歴史家の探究を後追いつているに過ぎない。のちのち、ヒュームが歴史家として名を成すことを考えれば、皮肉の効いたエンディングとも言える。未来において、ヒュームの著したイングランドの歴史書も、移り気な読者から読み捨てられる可能性があるのだから。

一連の文章の流れは、『人間本性論』第3巻出版以後に見られる、エッセイ執筆への転回を予期させるものがある。ヒューム自身は後年、若き日に体系的な哲学を志向し、『人間本性論』を構想したが、その出版市場における反応を見て、脱線的で愉快的な哲学エッセイへと方向転換したと、自伝で語っている⁶⁾。しかし、これまでの本文読解に基づけば、『人間本性論』第2巻には、すでにエッセイ的な散文要素が、萌芽的に含まれていると言える。いわば、第2巻の最終セクションは、書き手の体系的な記述意志を、エッセイ的な個別具体性への興味関心、そして思考の脱線性が凌駕していく過程を示している。ヒュームの書く散文の中には、事象を分類して概念的に統合しようとする力と、一つのトピックが別のトピックを導入し、個別事象の連鎖が予期せぬ思考平面を作っていく、創造的な脱線の力がせめぎ合い、この二つの内、後者の力が覇権を握っていくプロセスが現れている。この文章内の力学変化は、ヒュームその人の（文筆家として

の) 生の軌跡と連動している。

7. むすび——自己了解／自己変容プロセスとしての 「情念論を書く」行為

情念論の構想と執筆は、ヒュームの生に対して「変容」の契機となっている。病気体験の後、ヒュームの内側で滞留していた混沌＝モヤモヤは、情念論構築のための参照事例となることで、隠された私的なものから、他者へのコミュニケーションに向う「思考のための共有財」として、その性質を反転させることとなる。情念論を書くヒュームを動かしていたのは、自らの言葉を外へと開く情熱であり、思考や探究を共にする仲間の希求である。その成果たる『人間本性論』第2巻は、他者と共にある（ことを志向する）情念論となっている。

書くことは、「共にする／共有する」行為であると同時に、自らを「隠す／韜晦する」試みでもある。ヒュームは医師への書簡で、自らの病状を「匿名」のもとで語っている。自分の名前や社会的立場が、病理判断や状況吟味に影響することを、彼は恐れていた。こうした匿名性への志向は、彼の情念論においても違った形で底流している。そもそも、『人間本性論』は匿名出版された書物である。こうした事態は、当時の出版世界で異例ではなかったが、後の別の著作物では「デイヴィッド・ヒュームという名前」がそこに現れていることに、留意せねばならない。『人間本性論』第2巻で提示される情念の事例は、書簡（あるいは伝記的事実全般）とクロス・リーディングした際、ヒュームの個人体験を想起されるものが見られる。ただし、情念論だけを読んでいると、それらの事例は「誰にでも経験されうる」もの、あくまで一般化された「誰にでも当てはまるけど、具体的な誰かに結びつけられない」事例として、読者の前に現れる。いわば、情念論を書く行為によって、かつての書簡においては「一人称」であったものが、『人間本性論』においては「三人称」の出来事として、変換・提

示されている。

通常の哲学／思想史探究において、『人間本性論』は知的巨人による古典として、概念批判やクリティカル・リーディングの対象となる。しかし、情念論の「語られ方」に着目し、ヒュームの理論と生を交差的に読解したとき、「若書き」としての『人間本性論』の有り様が見えてくる。情念論の背後にいるヒュームは、若い。自身の「執筆前に予告・計画したこと」と「実際に書いていること」のズレに直面し、体系的に情念論をまとめようとしつつも、最後には、全体から逸脱する箇所が生成拡張する。そして、俯瞰的記述よりもこうした「断片的示唆」の方が、実は読者にとって面白く、彼ら彼女らを惹きつける予期せぬ結果を生む。情念論のナラティブは、一方で若いヒュームが自らの過去を消化し、文の流れを制御し、自分自身を変容させ、一つの体系的な書物を生み出そうとする意志を、強く表出している。書くことによる、パフォーマティブな治癒の試みという点で、これらの意志はある程度実っている、と言える。他方で、自らのナラティブの奔流に、あるいは、選択した思考スタイルの潜勢力に、ヒューム自身が驚き、振り回されている様子も見える。この両義性は『人間本性論』そのものが、すでにヒュームの哲学的エッセイへの転回を内包している、ということを意味する。

いわば、情念論のナラティブの流れは、ヒューム自身の「書くことをめぐる自己了解プロセス」を示している。一般的には、『人間本性論』の出版と象徴的「死産」の後、ヒュームは体系的哲学記述から離れ、脱線や連想をふんだんに盛り込める「エッセイ」という文芸ジャンルに、転回したとされる。しかし、エッセイへの転回はもっとそれ以前、すなわち「ヒュームが『人間本性論』を書いている渦中」で生じているのである。

Notes

- 1) 本稿は、2024 年度慶應義塾大学・学事振興資金（個人研究）「文芸共和国に住まう哲学者：デイヴィッド・ヒュームによる知の変奏と循環」に基づ

いた研究成果の一つである。ここで扱う「哲学者の生をめぐる反実仮想」については、ヨーク大学での Jon Mee との討議（2024 年 9 月 13 日）、ケンブリッジ大学での武田将明との懇談（2024 年 9 月 23 日）のなかで、その着想が輪郭を得ていった。執筆・改稿作業においては、橋本良一からのコメントが助けとなった。その過程で、Robert Douglas-Fairhurst の *Becoming Dickens* について、哲学者の伝記ナラティブへの応用可能性を、共同検討することができた。

- 2) 伝記的叙述において、対象の人生を、終わりから遡及的・目的論的に提示するのではなく、その生の始まり・途上において（後年、選び取られなかった可能性を含め）対象の未来に広がっていた複数の方向性について、記述するというスタイルもあり得る。これは方法論的な難しさを含むが、伝記がフォーカスする対象について、彼／彼女にとっての「その時点での現在」というのは、絶えず複数の可能性に開かれ、彼／彼女は「そのうちの一つ」を未来として選び取っている、さらにその時点で未来に何が起こるかは、本人にとって「曖昧模糊としている」ことは忘れてはならない。反実仮想を含む伝記記述の実験として、例えば Robert Douglas-Fairhurst, *Becoming Dickens: The Invention of a Novelist* (2013) の “Prologue: Somebody and Nobody” を参照のこと。
- 3) 翻って、ヒューム研究のなかで、情念論を中核的に扱わないものにおいても、探究の過程で情念／情念論が主題として浮かび上がってくることも、注目し得る。例えば、ヒュームの思考世界を徹底する、社会的・歴史的まなざしを包括的に論じた Claudia M. Schmidt の *David Hume: Reason in History* (2003) では、第 6 章が情念／情念論に割かれている。
- 4) 情念論の領域を越えると、ヒューム哲学における外への思考＝ソーシャルなものへの転回、について焦点を当てる研究は、一つの知的潮流を成している。例えば、Christopher J. Finlay の *Hume's Social Philosophy* (2007) や Paul Sagar の *The Opinion of Mankind: Sociability and the Theory of the State from Hobbes to Smith* (2018) を参照のこと。
- 5) 『人間本性論』第 2 巻の基本構造については、日本語訳に付された解説、石川徹「ヒューム『人間本性論』における情念論」が明瞭な整理と関連主題の指摘を行っている。本稿での概要記述も石川解説を参照し、駆け足の全体俯瞰を行っている。
- 6) “My Own Life” の第 8 段落を参照のこと。『人間本性論』の出版市場における不発は、「その主題のためというより、その書き方にある」(more from the manner than the matter) と考えたと述懐している。

Works Cited

- Árdal, Páll S. *Passion and Value in Hume's Treatise*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 1966.
- Baier, Annette C. *The Pursuits of Philosophy: An Introduction to the Life and Thought of David Hume*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2011.
- Cavell, Stanley. *A Pitch of Philosophy: Autobiographical Exercises*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1994.
- Douglas-Fairhurst, Robert. *Becoming Dickens: The Invention of a Novelist*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2013.
- Finlay, Christopher J. *Hume's Social Philosophy: Human Nature and Commercial Sociability in A Treatise of Human Nature*. London: Continuum, 2007. Continuum Studies in British Philosophy.
- Harris, James A. *Hume: An Intellectual Biography*. Cambridge: Cambridge University Press, 2015.
- , and Tolonen, Mikko. "Hume In and Out of Scottish Context." *Scottish Philosophy in the Eighteenth Century Volume 1: Morals, Politics, Art, Religion*. Ed. Aaron Garrett and James A. Harris. Oxford: Oxford University Press, 2015. 163–95.
- Hume, David: *A Treatise of Human Nature*. Ed. David Fate Norton and Mary J. Norton. Oxford: Oxford University Press, 2007. The Clarendon Edition of the Works of David Hume.
- . "My Own Life." *Essays Moral, Political, and Literary*. revised ed. Ed. Eugene F. Miller. Indianapolis: Liberty Fund, 1987. xxxi–xli.
- . *The Letters of David Hume: Volume I 1727–1765*. Ed. J. Y. T. Greig. Oxford: Oxford University Press, 1932.
- Mossner, E. C. *The Life of David Hume*. 2nd ed. Oxford: Oxford University Press, 1980.
- Norton, David Fate., and Jacqueline Taylor, ed. *The Cambridge Companion to Hume*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press, 2009.
- Radcliffe, Elizabeth S. *Hume, Passion, and Action*. Oxford: Oxford University Press, 2018.
- , ed. *A Companion to Hume*. Malden: Blackwell Publishing, 2008.
- Sagar, Paul. *The Opinion of Mankind: Sociability and the Theory of the State from Hobbes to Smith*. Princeton: Princeton University Press, 2018.
- Schmidt, Claudia M. *David Hume: Reason in History*. University Park, Pennsylvania: The Pennsylvania University Press, 2003.

- Schroeder, Mark. *Slaves of the Passions*. Oxford: Oxford University Press, 2007.
- Stuart-Buttle, Tim. *From Moral Theology to Moral Philosophy: Cicero and Visions of Humanity from Locke to Hume*. Oxford: Oxford University Press, 2019.
- Taylor, Jacqueline A. *Reflecting Subjects: Passion, Sympathy, and Society in Hume's Philosophy*. Oxford: Oxford University Press, 2015.
- Traiger, Saul, ed. *The Blackwell Guide to Hume's Treatise*. Malden: Blackwell Publishing, 2006.
- 石川徹「解説：ヒューム『人間本性論』における情念論」, デイヴィッド・ヒューム『人間本性論 第2巻：情念について』石川徹, 中釜浩一, 伊勢俊彦訳. 東京：法政大学出版局, 2011年. 223–356.
- 勢力尚雅, 古田徹也編『英米哲学の挑戦：文学と懐疑』東京：放送大学教育振興会, 2023年. 放送大学教材.
- 中村雄二郎『情念論』東京：岩波書店, 1993年. 中村雄二郎著作集1.
- 山内志朗『感じるスコラ哲学：存在と神を味わった中世』東京：慶應義塾大学出版会, 2016年.
- 『小さな倫理学入門』東京：慶應義塾大学出版会, 2015年. 慶應義塾大学三田哲学会叢書.